

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 15 日現在

機関番号：32601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653055

研究課題名(和文)現代経済学を射程に入れた経済学史の可能性

研究課題名(英文)Possibility of the History of Economic Thought in Modern Economics

研究代表者

藤井 賢治 (FUJII, Kenji)

青山学院大学・国際マネジメント研究科・教授

研究者番号：20189989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：現代経済学はもはや個人名で語るができない状況にあり、従来型の経済学史は早晚行き詰るといふ危機意識の共有と、解決のための糸口を見出すことを課題とした。個人ではなく学派を単位とするとか、方法論的観点からの接近を強化するとか、進化経済学的な切り口を取り入れるとか、統計的手法をもっと積極的に利用するとか、萌芽的なアイデアを報告し合い、濃密に討議する機会を設け、一定の相互理解を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：Modern Economics has flourished and diverged into so many branches that no historian of Economic Thought can get even a rough sketch of how economics in last two decades. It is evident that conventional method of history of Economic Thought which pays attention on a few major economists. We tried to seek an alternative way for the discipline. We tentatively have got a conclusion that instead of dealing with individual writers we need to describe schools which have risen, followed and dwindled or perished. To do so, it might be fruitful to borrow some conceptions and logic from evolutionary economics.

研究分野：経済学史

キーワード：学史研究の危機

1. 研究開始当初の背景

長らく経済学史は、個別経済学者に焦点を当て、詳述するという方法で行われてきた。しかし、現代経済学は多数のジャーナルが乱立し、特定の偉大な経済学者を語るだけでは全体像をとらえることが困難になってきている。このような状況変化は、旧来型の経済学史研究の方法からの脱却を我々に迫っている。ところが、経済学史分野ではこの時代の経緯を「新古典派」vs.「ケインズ派などの批判勢力」の図式で描き続けている。

このような状況変化が間断なく進行してきているにもかかわらず、経済学史学会の報告には目立った方法論上の反省や危機感に基づくものがほとんど見受けられない。変化の必要性、緊急性の意識を高めるために一石を投じるような研究がぜひとも必要である。

2. 研究の目的

経済学史は経済学の学としての自己規定を免れ得ない以上、経済学の見取り図を描くことは経済学史固有の課題である。個人名もしくは学派名という切り口ではない、別の切り口と方法がぜひとも必要である。いくつかの視点、切り口を並行的に評価し、新たな学史の接近法を模索する。

現代経済学が多岐に岐岐していった1970年代以降の学説史を記述するための基礎的な研究として、「情報の不完全性を認め、組織の役割、制度の役割、法の役割を積極的に認め始めた新古典派」の市場観について考察する必要がある。最終的には、この新しい新古典派がマーシャル的研究計画の延長線上に位置づけられることを示す。

3. 研究の方法

(1)第1段階 マーシャル研究のまとめ

これまで自身で行ってきたマーシャル研究を以下のような視点でまとめる。

彼の経済学の基本的性格をプルートルロジとして押さえ、その性格から、以下のような視点でまとめる。

専門化によって高度化する分業生産、
専門化した能力を統合するための組織、
分業生産を高度化するために必要な学習、
学習インセンティブの必要条件としての公正、

公正確保のための制度、
プルートルロジ（生産の学）に対置されるのは、カタラクテクス（交換の学）である。マーシャル経済学をプルートルロジとしておさえるという視点は、同時に、1970年代までの「新古典派」の基本的性格をカタラクテクスとしておさえるという視点を意味する。

(2)第2段階 情報、組織、制度、法の市場補完的役割の認知

情報の不完全性に注目した情報の経済学、

取引費用の存在に注目した組織の経済学、自発的に選択されたルールとしての制度に注目した新制度学派、取引ルールの整備と明確化によって公正な市場作りを課題とする法と経済学は、相互に浸透し合う共通の市場観を有している。何れの分野もすでに学界内での認知・定着から相当の時間が経過し、それぞれの分野での総括、サーベイ論文も資料として利用可能になっている。各分野が何をどこまで共有し得ているのかを整理する。

(3)第3段階 マーシャル的研究計画の再評価

「1970年代以降の新たな新古典派」は、市場的解決（市場交換）をメルクマールとするワルラス的な世界からの離反であり、マーシャル的な世界への再接近である。このような主張をしても、現時点では受容される下地は存在しない。マーシャル研究者による単なるマーシャルびいきの主張ではないことを示すには、第1段階の「マーシャル研究」と、第2段階の「新しい新古典派」研究とが多くの共通点を持つことを示す必要がある。単行本の形で、これを実現させたい。

経済学の現状と今後に関する問題意識を喚起すべく、粗削りなままであっても発表し、討議を通して問題意識の共有を進める。

また、自身で主催する研究会を通して、定例的な学会や研究会ではできない問題意識を共有するメンバー間での濃密な討議を実現する。

さらに可能であれば、経済学史分野にこだわらず、隣接分野の学会における動向をつかむべく、他学会・他研究会に参加して、それぞれの分野の学史研究がどのように行われているかについての知見を得る。

4. 研究成果

個人の成果としては、研究期間中全体で、論文2本(1本は学会誌、もう1本は図書所収)と学会発表1回、そして海外での研究報告1回であった。

学会発表での討議、また研究会発表での討議から判明したことは、多くの研究者は旧来型の研究に終始しているせいか、私の投げかけた問題の緊急性や重大性への共感が意外なほどに少ないことに驚いた。各人は、スミス研究を始めとして、リカード研究、ミル研究、ケインズ研究など旧来型の党派的な研究で良しとする空気が根強いことが確認できた。期待したほどの反響を呼ばなかったことは残念な結果ではあるが、視点を変えればこの問題意識を継続的に投げかけていくことの必要性を再認識させられたということもできるかもしれない。

研究会での反応は、少数の同一メンバーで継続的に行ったことが功を奏して、学会や研究会での反応とはずいぶん違ったものであ

った。自身を含めほとんどの研究会参加者は旧来型の研究方法の限界について多少なりとも行き詰まりの感を共有していることが判明した。これは、本研究会が潜在的な問題意識を顕在化させることに役立ったことを意味している。また、顕在化させるだけでなく、方向性としては学派単位で流れを見ることの重要性と、明示的でなくても使用される概念と論理から方法論的特性を特定化し、類型化していく作業が必要であるという点での概略的な合意が形成できたように思われる。

すべての成果は、経済学者を単体（具体的には、A. マーシャル）で論じるのではなく、現代経済学に連なる流れの中に位置づけることを目指した。とりわけ、組織論の世界を切り拓いたR. コースや、現代の産業集積論へと受け継がれた側面を強調した。

自身が主催する研究会を計4回開催し、参加者からは格別に意義のある報告と討議を経験できたとの謝意をいただいた。

明確な方向性をつかめたというところまでには至らないが、組織を含む広義の意味での制度的進化の観点から、各学派の進化（ないし退化）過程として経済学史を記述することが有効なのではないかとの暫定的な結論に至った。

研究開始時点では、以下のように、3年計画、3段階で研究を進める計画であった。第1段階「マーシャル研究のまとめ」は十数編の自著論文を「知識、組織、制度」を鍵概念として新たに編み直す。第2段階は、1970年代以降の組織の経済学、制度の経済学、そして「法と経済学」の進展を概観することである。経済問題の解決手段として、市場以外の組織、制度、法の役割が再評価されてきた経緯を「市場機能の相対化」として整理する。第3段階は、マーシャル経済学の基本的性格が現代経済学と通底するという主張を一冊の本にまとめることが課題になる。

第一段階に関しては、自著論文を編み直して、著書公刊の準備作業を行ったが中途のままで終わった。従来型の学史研究からの脱却を試みるという問題設定をしておきながら、自身がかつて書いた論文のまとめをするという作業を進めるにしたがって有意義さを問わずにはいられなくなり、途中で投げ出してしまったというのが正直なところである。

第二段階に関しては、昨年度末の学会誌に掲載された論文が一応の成果と言える。意図的に従来型の学史研究論文のスタイルからの逸脱を意図していたこともあって、レフェリー段階でかなりの苦勞を強いられることになったが、レフェリーや編集委員会との厳しいやり取り自体が大変に有意義なものであったと考える。

第三段階は、順番としては一番最後に位置づけていたが、自身の論文としてまとめることと同程度に重要なことは、繰り返し同趣旨の報告をし、問題意識の喚起と共有を図るこ

とが必要である。この目的意識のもと、学会発表2回以外にも、北海道部会でも報告機会を持った。何より、自身で計4回開催した研究会は、事前に想像していた以上に有意義なものとなった。

1年の延長期間をいただいて延べ4年間の研究期間が経過したが、全体として計画の進捗度を評価すると、道半ばという感が否めない。マーシャルの世界から抜け出て、ケンブリッジという括りで議論する地平にはかろうじて達したものの、現代経済学を視野に入れた研究世界を切り拓くという点では、コースの組織論、および現代の経済地理学の中にマーシャルの特徴が継承されているという形で、ほんのわずかな関連を示すにとどまった。

より多くの非主流派の経済学者を射程に入れて、現代経済学と対置させるには、問題意識を共有する連携者を増やし、最低でも数人のチームを組むような体制をとらなければ実現はおぼつかないことを痛感した。

また他学会のメンバーとの交流の機会を探るといった計画もあったのだが、本務校での土曜日の講義が強い制約になって、他の学会や研究会に顔を出すこともかなわなかった。

総括すれば、計画達成度は50%程度というところであろう。事後的に見れば、計画はかなり前のめりであり、時間をかけて周囲に理解と協力を求める体制づくりが必要な点が多分に考慮されていなかったと反省するところである。とはいえ、中堅の研究者数名との間に相互理解と問題意識共有の関係を構築できたことは、今後の研究のベースとして生かしていけるのではないかと考えている。学史研究は、今後、これまでのスタイルを破棄するくらいの覚悟で、新たな研究方法とスタイルを模索しなければならないとの危機感と一定の方向性の共有にいたったことが成果である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1件)

藤井賢治、「マーシャルにおける組織 - 生産の経済学の観点からの再評価 - 」、『経済学史研究』(経済学史学会)、No. 56-2、pp. 28-45、2015.1、査読あり

〔学会発表〕(計 3件)

藤井賢治、「マーシャルにおける組織：生産の経済学の観点からの再評価」第4回ケインズ学会、立教大学池袋キャンパス、2014.11.30

Kenji Fujii, Marshall's economics and Marshallian Paradigm, 3rd ESHET-JSHET

Meeting held at Corsica Pasquale Paoli
2012.9.15

藤井賢治、「マーシャル的研究計画の可能性」、経済学史学会 2013 年大会 2013.5.26、
関西大学

〔図書〕(計 1 件)

藤井賢治、マーシャルとケンブリッジ学派
『マーシャル型の新古典派』、『ケンブリッジ
とは何か』ミネルヴァ書房(近刊) 第 3 章

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 賢治 (FUJII, Kenji)

青山学院大学・国際マネジメント研究科・教授

研究者番号：20189989

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：